

2019 年 3 月 4 日

JIC 日本イリノイクラブ「同窓会」・文化学院同窓会アーチの集い 共同開催
「佐藤昌三先生を囲む会」

「アメリカで 60 余年 日本伝統芸術を伝えて」

イリノイ大学 UC 芸術学部名誉教授 イリノイ大学名誉芸術学博士 タウソン大学名誉人文博士

佐藤 昌三

- 1 イリノイ大学への道
- 2 イリノイ大学日本館
- 3 イリノイカブキ
- 4 文化学院と私
- 5 なぜアメリカで日本伝統芸術

— 略歴 —

佐藤 昌三 (さとう しょうぞう)

イリノイ大学 UC 芸術学部名誉教授、イリノイ大学名誉芸術学博士、タウスン大学名誉人文博士。

1933 年 5 月 18 日神戸生れ。文化学院油絵科卒業。東宝芸能学校第二期生。

幼少の頃から日舞を習い、院展小松均画伯から日本画と墨絵を習う。

文化学院で陶芸と油絵を学び、また、茶道と華道を修行。

東宝芸能学校では、タップ、バレエ、日舞、声楽、演劇史を勉強。

テレビや映画にも出演する一方で、鎌倉に自ら「鎌倉美術塾」を開いて教え始め、また、横須賀の米軍基地で小中学校の美術の指導をする。

1964 年 イリノイ大学に客員芸術家として招聘。

1968 年より助教授として美術・デザイン科において日本伝統芸術講座を創設。書道、水墨画、いけばな、茶道などの伝統芸術を通しての比較文化のカリキュラムを指導し、24 年間教授を務める。

1975 年 イリノイ大学キャンパス内に日本文化の拠点「日本館 (Japan House)」を自らの手で建設。

1997 年 「日本館」の建て直しのために奔走。

1999 年 「新日本館」が完成。

同年 永年の功績を認められ、イリノイ大学名誉芸術学博士号を授けられる。この称号は、イリノイ大学 170 年の歴史の中で、マーク・カニングハム (モダンダンス)、中村勘三郎に続いて三人目。歌舞伎は中村勘三郎の直弟子で、勘藏の名を許されている。「マクベス」「メディア」「ファウスト」「オセロ」などの有名な西洋古典劇の歌舞伎版をプロデュースし高い評価を得た。

1985 年「カブキ・メディア」がベスト・オブ・シカゴ・フェスティバルのプログラムの一つとして、ケネディー・センターで上演され、ハリウッド・ドラマ批評家賞の最優秀技術賞を受賞。

その他、国際実験演劇祭監督賞、カイロ演劇監督賞、イスラエル国際演劇賞、キプロス島演劇祭にても受賞。

1992 年 日本の外務省より外務大臣賞を授与された。

1998 年 米国水墨画ソサエティーより優秀アーティスト・ティーチャーに認定された。

2003 年 シカゴ日米協会から第一回文化成就賞受賞。

2004 年 瑞宝小綬章を受章。

1992 年にイリノイ大学を退官後も、客員教授として招かれた大学で日本伝統芸術の講座を開講し、またシカゴ美術館はじめ芸術センター等の施設で講義や茶道の実技を披露するなど、日本伝統芸術のための活動を続けている。またフリーランスアーティストとして、ノースウエスタン大学、タウスン大学などで創作歌舞伎の演出、デザインなどもおこなっている。

【著書】:『和のこころ』(慶應義塾大学出版会〈英語・日本語〉),

『IKEBANA』,『Sumi-e』,『SHODO』(チャールズ・イー・タトル出版)

「アメリカで 60 余年 日本伝統芸術を伝えて」

佐藤昌三

1 イリノイ大学への道

1950 年代から鎌倉市の長谷で、小規模のカルチャーセンター「鎌倉美術塾」を自宅で運営して、そこでは私が茶道・生け花・日本舞踊など、文化学院の友人達がデッサンや水彩画を、また近くに住む書道家の先生も加わり教えていました。

当時の鎌倉は横須賀米海軍の将校達の家族が大勢住んでいて、夫が航海に出ている期間は、婦人達は生け花等を習いに来られ、また、近くに住む高校生達の間で、塾に行けば英会話が学べると評判になり、受講生が増えていたのです。しかし、塾を運営するには色々と出費が多く、それをカバーするために、当時フジテレビ局の毎週土曜に放映されていた「東は東」というバラエティー番組などに常連として出演して、その出演料で塾の運営を賄う状態でありました。

当時イリノイ大学の芸術学部モダンダンス科の主任教授の Margaret Erlanger 女史がフルブライトスカラーとして来日し、日本の芸術家達の幅広い制作活動を研究する目的で、「鎌倉美術塾」に 2 週間にわたり東京から毎日見学に来られていて、最終日に「私はイリノイに帰るが、もしイリノイ大学から訪問芸術家としての招聘があれば、渡米する気持ちはあるか」と聞かれました。私は「日本でも有名なイリノイ大学に行けるのであれば喜んで」と承諾しました。

その当時「イケバナインターナショナル」というイケバナ愛好家達のグループが、アメリカを始めヨーロッパの人達で結成された、というニュースを聞いて、21 歳の成年式を迎えた際に、自分も大人の仲間入りをしたので何か意義のある事をしなければと原稿を書こうと思い立ったのです。そして、生け花をアメリカに普及するために基本的な原稿を書き上げました。数年後その原稿がニューヨークの著名な出版社ハーリー・N・エーブラムス社の目にとまり、花材と住居は当方で用意するから、花器一式を持ちニューヨークに 6 ヶ月間来てほしいという渡米要請を同時に受けたので、渡米を決意したのです。

花器類や大学でデモンストレーションのために必要な道具類 5 トンを、飯野海運の貨客船に積み込み渡米しました。

1964 年 2 月に横浜を出航、サンフランシスコで数日停泊し、12 人の乗客の内、私以外は下船。貨物を下ろす数日間、サンフランシスコを見学する機会もありました。パナマ運河を通過して、3 月にニューヨークで荷物を下ろし、1 ヶ月の船旅を終えてアメリカでの生活が始まりました。当時のニューヨーク市には、日本文化の一片としては「すき焼き」レストランが

1軒だけといった状況でした。

持参した生け花の原稿は、活ける技法と基本を元とした 200 頁のものでしたが、社長のエーブラムス氏は Ikebana 芸術を紹介する最高の出版物にしたいと、400 頁に増やすことを要望されました。

1964 年 9 月から翌年 2 月までの期間に、日本で使われる 12 ヶ月間の Ikebana 材料を世界各国に花材を発注する計画を立て、私は新築のエーブラムス出版社の広々としたコンドミニアムで、毎日、立華・生花・自由花などを持参した花器に活けておりました。

活けあがると写真家が撮るのですが、その撮影方法は、まだ日本では珍しい 8×10 インチの大型フィルムを使い、オープンシャッターで、照明具は手持ちのライト一つだけ用意して、それを自在にあやつりながら光の具合を加減するというやり方でした。

一方で 9 月から撮影を始めるまでの準備期間中に、イリノイ大に向けて大学用の荷物を送り、エーレンガー教授の計らいで、キャンパスでの顔見せ活動として日舞のコンサートなど色々なデモンストレーションをおこないました。

再びニューヨーク市に戻り、翌年 2 月にはエーブラムス氏の企画に従い、本の頁構成に合わせて、色合いの花や立華などの各様式の活け花を活ける仕事は完了。そのあと新しく原稿を書き足したり、本としてのデザイン関係のレイアウトや装丁などをおこなったり、最終制作の期間ニューヨークに滞在しました。

1965 年 4 月にはイリノイ大学のキャンパスに本格的に移動し、シャンペンでの生活の準備、日本舞踊の会や新学年度からの活動の準備を始めました。

1966 年、エーブラムス出版社から「THE ART OF ARRANGING FLOWERS」として出版された私の初めての本は、初版 3 万部、その翌年より 3 年続け増刷されて合計 9 万部という当時としては信じられない量の売上で、エーブラムス出版社はアメリカ出版協会から優秀出版物の賞を受けました。その印税のおかげでイリノイ大学での生活の資金的な基礎ができたのです。

訪問芸術家として、大学だけでなく近郊の色々な団体やシカゴ美術館などで、日本伝統文化の実技を忙しく続けておりました。

1970 年代初期、GM その他アメリカ自動車産業のメッカ、デトロイト市でブルーカラーと言われる自動車産業の工員が、下町のバーで飲んでいた中国人青年を日本人と間違えて殴り殺す、という惨事が報道されました。そして日本製品不買運動が大きくなっていたときに、デトロイト市に近いミシガン大学から、日本文化について何かしてほしいと招聘されました。

アメリカの知識層に興味がある茶道を伝えるために、GM のバンに道具を積み込み、もしかすると殴り殺されるかもしれないという不安な気持ちでドライブを始めたのでした。

当時のアメリカでは未だに日本について欧米産業技術のコピーをして成長期にある国という見方を持っていた人達が多いなかで、いかに日本文化の根底を説明すべきかを考えて、湯水を扱う日本製の竹の柄杓(ひしゃく)を余分に準備しました。私は点前とその動作の意義を説

明したあとで柄杓を持ち出し「この柄杓を見てください。竹の筒の一部を切り取り、そして厚い竹を薄く削ってカップを作り、同じ竹の細長い柄（え）をそのカップの半円形の側面に、釘や接着剤を使わずにピタリと差し込む。乾燥しているときには簡単に柄は取り外せるが、湯・水に浸けると膨張して湯水は漏れなくなり固定できる。その上、カップ部を取り外した柄の部分は、形態的にも現代彫刻のように美しく機能的である。このように竹の柄杓一つを例にとっても、“いかに素材を使いこなすか”という感性と技能は、すでに西洋産業革命の1760年代よりも何世紀もの前から日本には定着していた。素材が竹であっても布であっても、あるいはガラスを磨いて作る最高のレンズや、鉄・金属などを総合的に集結しての自動車など、素材の違いはあってもそれを最大限に、“使いこなす才能・技量”はすでに定着していた」と、話しながらカップの部分と柄の部分を取り外し観客に見せたのでした。

日本橋三越で毎年行われる「日本伝統工芸展」を観ると、あらゆる素材を使って世界最高のアート&クラフトの見事な作品にその作家達・日本人の持つ世界に類のない美的感覚と技量、且つ精神力などを再認識させられて、日本を長年離れている私には、日本人独自の創作力に日本人の一人としての大きな誇りを覚えます。

ミシガン大学での体験後、シカゴ駐在日本総領事に呼ばれて「佐藤先生、お茶やお花はもう結構ですから、少し日本の産業がいかに欧米の後を追いつき、そのレベルに達したか、また、現在の経済等の話をしてください」とのお叱りを受けました。私は総領事に、「日本が西欧の猿まねに成功したと、自ら認めると言わせるのですか。経済の話には彼達は興味を持ちませんから、私はアメリカ人達の興味を持つ日本の伝統的な素材を通して、日本人が持つ本来の優れた創作感性とその機能を」と前記の柄杓を使っての話を説明しました。それ以来その総領事からは何も言ってくるませんでした。

2 イリノイ大学日本館

1964年イリノイ大学アーバナ・シャンペンキャンパスに日本の文化を紹介する目的で客員芸術家として招聘され、その当時は私が大学の近くの商店街などを歩くと、「オリエンタルが歩いている」と市民達は私を指さして囁いており、現在の「Asian」という表現もまだなかった時代でした。Student Union 学生会館のギャラリーで墨絵やイkebanaの展覧会や茶道のデモンストレーションなどをと、色々な教授のクラス、また学生達のドミトリーにも呼ばれて忙しく、完全でない英語で説明しておりました。その当時、ユニオンの職員の一人だった日系の青年が、JICの皆さんはご存じの私の後を継いで日本館館長を務めた郡司紀美子準教授の夫となる郡司健氏でした。

当時ベトナム戦争の最中で、学生達はその戦争に反対し講義をボイコット。古株教授を校庭に呼び出して「何年間同じノートを使つての授業なのだ」と何百人もの学生達による吊し上げに遭い、囲まれ叫ばれて震えている教授達の姿は今も忘れられません。

そうした学生達の授業拒否の騒ぎに、学生達の町筋グリーンストリートの商店街では、普段学生達に不親切な店は窓ガラスを割られる事が多くあり、各商店には厚いベニヤ板が窓に釘打ちされ、ナショナルガードの兵士達や戦車まで街角に配置される状態でした。日本でも同様な体験が東大その他の大学でもありました。

そうした授業拒否の期間、私のクラスのみ学生達に認められ、昌三のクラスに行くのでドアはあけられ、毎日ピースマークや平和などの文字を学生達が書き、それを校内や町に貼り付けたのでした。その後、アメリカの大学組織としては大変に異例ですが、学生達の強い要望に応じて、私を客員芸術家ではなく、芸術学部の美術科の助教授として正式に雇用してくれました。

最初の教授会に出席した私を、古株の教授が突然テーブル越しに私を指さし、戦後進駐軍の G.I.であった教授は、敗戦国民達として惨めな生活を強いられていた日本人の若造が、と「ヘイユージャップ、お前は我々に何を教えるつもりだ」と嘲り、悔し涙を流す体験に、Officeを共にしていた A.D. Moore 氏（彼も日本に駐在した軍の G.I.でしたが、その期間に日本美術に開眼していたデザイン部門担当の教授）が、「彼達を見返すのには、ショウゾウはスーパージャップになれ、アメリカ人はスーパーには弱いから」と慰めてくれて、以後はそうした周囲から守ってくれたのでした。

そのような環境の中で、私に与えられた「日本伝統芸術講座」の教室はふだんは、油絵の教室で、蛍光灯の眩しい、学生達の制作中の何枚もの未完の油絵がイーゼルにかけられていて、汚れた床にゴザを広げて茶道具を並べるという状況でした。これでは余りにも侘びし過ぎると、当時私の住居であった借家の広間を和式に体裁を整えて、茶道のクラスを始めました。学生達は入口で靴を脱ぎ、床の間の掛け軸に一礼してからクラスが始まるという授業であり、キャンパスから 10 分以上は歩かなければならない不便な教室ですが、学生達から好評で、受講待ちが 4 学期にもなる状態でした。

慶應義塾大学とイリノイ大学との学術交流を始めるレセプションで、初めて会った当時学術担当副学長のモートン・ウエアー博士の計らいで、**1973 年**キャンパスの中にあった大学所有の古いビクトリアン様式の民家を、大学から当時の金額で月 500 ドルの私費を大学に支払って借り受け、これもまた自費で 2 年間の夏休みと冬休みの期間、私の助手を務めていたジム・ウエスト君（現在は日本人女性と結婚、イリノイ大と交流のある甲南大学や関西国際大学などで日本文化を教えている）と共に大改造を行いました。そして 1 階のエントランスホールに坪庭を造り「つくばい」を据え、3 部屋を書院風、数寄屋風、草庵風に改造、大きなキッチンには懐石料理の教室としました。

1975 年 9 月に「日本館」と名付け開館。その教室で「日本伝統芸術講座」と題したコースを教え始めました。

春学期の母の日、秋学期の父の日には一般市民達にもオープンハウスとして色々な趣向の展示、マーシャルアート等のデモンストレーション、和式庭園らしき前庭で立礼の点前などをおこない、珍しさで賑わいました。

当時イリノイ大に在住していた日本人会の会員の家族達も、それぞれ食べ物などを持ち込み、日本人会会合や日本のテレビでポピュラーなプログラムをビデオテープで観る和気あいあいとした集まりを度々行いました。その当時の日本人会会長はコンピューターサイエンスで有名な故室賀三郎教授で、コンピューターサイエンスの教本の印税が入るので、日本館運営の費用に当時の2-3百ドルを寄付として度々サポートしてくださったのでした。

日本伝統芸術講座の内容について、当時の芸術学部の部長オフィスに呼ばれ、アメリカの州立大学では、例えば宗教学の教程では、一つの宗教、例えばカソリックだけ教えることはできない、他の宗教との比較研究でなければならないアイボリータワーの規則があるので、それを守る様にと言われました。その学部長の指示により日本芸術講座では流派にこだわらず、日本の芸術として三次元には古典生花、二次元は墨絵と書道、いずれも線と日本独自の活性空間の構成、真（しん）・行（ぎょう）・草（そう）、真（しん）・副（ふく）体などの構成様式、さらにマキシマムアートとして、二次元の例えば桃山美術の雄豪華麗な金碧障壁画、三次元として日光の東照宮を取りあげ、ミニマムアートとして、俳句・墨絵に茶室建築などで、この美学構成は日本のすべての古典に見られる禅美学の影響についても説明。禅思想を基本とするこれらの伝統文化から「茶禅一味」と言われる茶の湯を選びました。

私は1992年に退官しましたが、郡司準教授が日本館の館長として活躍されておりましたが、日本館の敷地に新しくイリノイ大学卒業生のためのALUMNICENTER建設のために立ち退きを求められ、その代わりにキャンパス南部に広大な庭園や森のある土地の一部の使用を許されて、新しい日本館の建設計画が始まりました。

しかし日本館はショウゾウが私費で運営維持をするから、と大学側からの建設費は計上してくれませんでした。その建設費はJICを始め郡司健氏がロータリークラブの会長を長年勤めておられた関係で、ロータリークラブを始め、国際交流基金など色々な団体や個人の方達の拠金によって建設されたのです。

1998年に「新日本館」が完成。郡司準教授の所属する裏千家から広間と小間茶室の寄贈、JICからは真の床の間を持つ広間の寄贈に、ジム・バイアー教授（Topographer 地形学）の私費で完成した新日本館を囲む美しい和式庭園と、イリノイ州土建協会の寄付として何台ものトラクターを使って大型の池を堀り、その土を盛り上げて造った大小の丘に囲まれた造園、旧日本館の約2倍の広さで、アメリカの他の大学には類のない日本文化センター兼クラスルームが完成しました。

「新日本館」の完成は郡司館長の努力と援助してくださった皆様方のおかげです。その後、前記のA. D. Moore教授の教え子の一人であり、紀美子女史の末娘であるジェニファー・郡司・ボウルズランド美術科デザイン部門担当主任準教授が館長として活躍しておられることはJICの皆様方は周知の事と思います。

郡司元館長は健康に恵まれて、「新日本館」で裏千家淡交会シャンペン支部、イリノイ大の

学生達が淡交会会員として色々な行事の手助けをしており、裏千家家元から感謝状を受けておられます。それに池坊シャンペン支部などを創立してそれらの支部長を長年勤めて、「新日本館」の施設を使い、現在も活躍しておられます。

3 イリノイカブキ

1969 年にはアメリカ三大パフォーミングアーツセンターと呼ばれる、「クラナートセンター フォー ザ パフォーミングアーツ」(Krannert Center for the Performing Arts) が完成しました。ここには五つの劇場が一つのロビーで繋がる巨大な音楽・舞踊・演劇の殿堂で、これはイリノイ大学卒業生である、ハーマン・クラナート氏(段ボールの発明と、それを使った運搬用各種の箱を大量生産して、大資本家となった)の膨大な寄付金のおかげで完成。その開館式の前に学部長が私をセンターの専任芸術家として任命されたのです。

開館祝賀公演に演劇科あるいはモダンダンス科等を選ぶとなると学部内の政治的な問題が起きるからと、「歌舞伎舞踊の会」での公演をとの命を受けて、急遽日本から神式祭壇一式を取り寄せて、神官の衣装を纏い開館のお清め神事のまねごとをおこないました。

舞台稽古の最中にクラナート夫妻が車椅子で見学に来られ、私は舞台から下りて、素晴らしい偉大なギフトのお礼の言葉を述べました。現在そのクラナート氏に直接会って話をした人間は私一人だけとなりました。

それまで校内の小さなホールで「歌舞伎舞踊」と名付けた日本舞踊、いわゆるダンスコンサートを度々上演していた関係で、「この機会にクラナートセンターで歌舞伎演劇のカリキュラムを創立すれば」との学部長の意向に従い、歌舞伎のクラスをアメリカの大学として初めて創立。演劇史、実技と前記の伝統芸術講座の必修により、幅広く日本の美的感覚やマナーの理解ができるということや、当時東洋文化の知識のないアメリカの学生男女に日本固有の腹に力を入れての所作や動作、発声法に始まり、2 年目には古典演目を視覚的には完全に近い歌舞伎様式で、台詞は英語での公演を始めて大好評となりました。

一つの演題の台本は、勘三郎師の楽屋にテープレコーダーを持ち込んで録音しておいた舞台の台詞を、イヤフォンで聞きながら、そのリズムのタイミングに合う英語を探しながらの意訳台本・舞台装置・衣装などの準備に、計 400 時間以上かかりました。

さて私は上演前に緞帳の前に和服姿で現れて、歌舞伎演劇の決まり事、様式性・誇張性に台詞の節回しなどを説明、簡単に実演したあと学生達の芝居が始まります。

美術科でのクラスでは限られた数のアメリカ人学生のみ日本文化の普及ができますが、劇場では 1,200 席いっぱいの市民達に、エキゾチックな演劇を通して、日本文化の一片を知らしめる大きな機会となることを見逃しませんでした。

学生による歌舞伎は木金土日の四回公演で、一年おきに演目を変えて公演しました。例えば能がかりの様式化された動きの松羽目物(まつばめもの)の「土蜘蛛」等は、割合に学生達には演じやすく、コメディとしての「身替座禅(みがわりざぜん)」、古典としての「俊寛(しゅん

かん)」等です。

ちょうど「俊寛」のリハーサル中、私の師匠である十七世中村勘三郎師一座が、首都ワシントンのケネディーセンターで「俊寛」を上演されると知り、学部長に絶好の機会と頼み込み、当時のイリノイ州は財政的に豊かだったので、学生達のセミナー旅行の全額を出していただきました。

勘三郎師滞在のホテルの部屋で学生達を紹介。師は目を細めて「君はどの役をやるのか、ではその台詞と所作をしてみなさい」のお言葉に、若い学生達はジーンズのまま英語で演じて見せると、「それはあの場の何処だね」とピタリ指摘され、俊寛を演じるジム・ウェスト君には中村家家宝の俊寛の衣装を着付けてくださいました。

ケネディーセンターのオペラハウスの舞台でリハーサル中の「俊寛」の見学も許されて、そのリハーサルを拝見していると、突然、師の声で「昌ちゃん、学生達を舞台上に来るように、そして今一座の俳優達が稽古していた所を学生達にやらせなさい」の師の声・・・

私の心臓が一瞬止まる思いでしたが、学生達は恐れ気もなく舞台に上がり、師の言われる場所を演じました。そして、師は息子の当時の勘九郎さん（後の十八世勘三郎）始め、著名な歌舞伎役者達に「お前達は役者だろう。アメリカの学生達がこれだけできるのだから、恥無いように演技をなさい」とのお言葉に驚き、恐縮した思い出が今も懐かしく、師匠の優しく心の広い、人間としての偉大さがよみがえります。

セントルイス、デンバー、フロリダに近郊の多くの大学からの要請で、伝統的なカブキ公演をおこなった忙しい10年間でしたが、次の10年間は400年間蓄積された演劇の知恵、歌舞伎本来の約束事、例えば舞台はあくまでも二次元に、照明は客席側からで顔に陰を出さないとか、黒衣の役柄、様式性と誇張性などを、いかにアメリカ演劇愛好家達に認知させられるか、思案しました。

演し物の筋のみを追って、ユニークな歌舞伎独特の約束事には気づかない観客達に、アメリカの高校時代から暗記させられていたシェークスピアのマクベス、オテロ等の古典とその文学としての台詞、ギリシア悲劇のマデア、アキレウスの台本を原本でなく、あくまでも歌舞伎調の台詞に合うよう俳句調に短縮、その上、仏教思想の輪廻などを織込み書き上げました。それによりアメリカ人周知の演劇もカブキ様式という未知の世界が浮き上がり、そのユニークさが認識されるのでした。

シェークスピアカブキのリハーサル中は英語学部の教授達が私の後ろに座り込み、あの台詞は、その台詞は絶対にカットさせない、と強腰でしたが、歌は唄と音楽、舞はバレエ、伎はシェークスピアを混ぜ合わせた音楽劇の様なものと理解してもらい、それ以来文句をつけなくなりました。その後も新しい台本は、私が日本語で俳句調に書き、英語版は友人のアメリカ人脚本家の助けで、何回もの会合や電話での理解で、台本は完成しました。

シェークスピアの華麗で長い文学を俳句調に短縮できるのも、日本独自の禅美学のおかげだと思っています。

視覚的にはあくまでも歌舞伎ですが、長年慣れ親しんでいる西洋古典演劇をプリズムのように角度を変えて見直す。この新しいチャレンジにシカゴの演劇界の批評家達は驚き、その結果、シカゴ演劇界では最高の「ジェファースン演劇賞」を監督・コスチュームなどで合わせて三回受賞しました。

首都ワシントンのケネディーセンターで公演される、日本からの玉三郎丈一行のグランド歌舞伎公演に合わせて、アメリカのカブキとの競演にと招待されて、ワシントンの新聞批評も好評でした。休日には歌舞伎俳優達とセンター前の芝生でベースボールなどを楽しむ機会もありました。

その時のイリノイカブキの演し物は「カブキ マデア」ギリシア悲劇で、これはシカゴの商業劇場でも大ヒットで 300 回以上も再演を続けました。

マデアを演じた主演女優のバーバラ・ロビンソンさんはイリノイカブキの元学生で「俊寛」の島娘を演じました、彼女は当たり役のマデアの演技で、ケネディーセンターの名誉あるヘレン・ヘイ賞を受賞しました。

その結果、読売新聞社、イリノイ州文化部、ユナイテッド航空などの支援を得て、カブキアキレウス「アキレス腱」、これもギリシア悲劇を演題として「イリノイカブキ日本里帰り公演」を 1990 年に実現。名古屋青年会館、田峯観音奉納歌舞伎「350 年間続く地歌舞伎」に歴史上初めての外来参加公演、最後には東京の歌舞伎座のすぐ裏にある中央区市民会館の大ホールでの打上げ公演。その公演には雨天の中、松竹の武山社長・演劇部長等も観劇されて、「筋書きも言葉も違うがこの公演は歌舞伎として認められる」と賞賛されて読売新聞と松竹株式会社共催で大きなレセプションをして頂きました。その後、アメリカ東海岸のフィラデルフィア市の著名な劇団との合流公演で、キプロス島に存在するギリシア時代からの円形劇場、ことに地中海を背景として夕方から焚き火を照明としての公演は印象に残っています。

次にはハンガリー国大統領の招聘で、ようやく共産政権が終わって市内には多くの銃弾の後が残る市内のビルディングに囲まれた劇場で公演をおこない、引き続きその国内各地の劇場でも公演を届けました。初代大統領のグンツ大統領は、共産党政府から監禁の長い期間中に色々な書物を読まれて、日本の茶道という文化に興味を持たれており、「茶道をおこなってくれないか」という特別な要望が招聘の要点でした。

ブダペスト市市長の市役所の大きなホールに閣僚一同と各国からの大使達を招待しての茶道の紹介には、小さな茶道具を持参し、その点前のために襖は真塗りの黒、蓋を開けると金の蒔絵と大統領の茶道知識を満足して頂けるようにと選びました。日本大使館から金屏風に風炉・釜などの道具を拝借し、大統領を正客とし点前を進めました。驚くことにグンツ大統領は、貴人点（きにन्दて）の天目台（てんもくだい）に乗せられた天目茶碗を見事に扱われ、所作通りに抹茶を楽しまれました。その後、閣僚・大使達にも抹茶を呈しました。この現状はテレビニュースとして全ヨーロッパに同時に放映されました。

その後イスラエル国のエルサレム市で行われた、国際新演劇祭にアメリカの新演劇代表として招待され「カブキ マデア」を上演。我々関係者一同は、まだ当時平穏だったイスラエル

国で、キリストの処刑された遺跡や生誕地、そして体を水面に横たえても沈まない塩分の高い死海で、カミソリ後の肌がピリピリ痛む体験し、周辺の古代の聖書に関係した遺跡などを見学する機会があり、イリノイカブキの学生達と同道した教授達もユニークな国際研修ができました。

これはイリノイカブキではありませんが、そうした活動の延長として東海岸メリィランド州ボルティモア市に隣接したタウスン市のタウスン大学演劇科の大学院創立の一端として新しい台本の作成とその公演を依頼されました。すでに十数年間演劇科の学生達を指導していたので、大学院の創設に協力を要請されたのです。大学院に入学した学生達と主任教授と合作で新脚本「イヤーゴの陰謀」を完成させました。

これはシェークスピアのオテロを、長年その腹心であるイヤーゴの自分がオテロ將軍の副官になれなかった恨みに、オテロの妻の美しいデズデモナの幼なじみで副官となった若く美男のキャシオとの関係を捏造(ねつぞう)して嫉妬の種を蒔き、悲劇に展開する陰謀を重点にした脚本で、この度は能楽の舞台の名乗り柱、脇座などの約束事を応用して、各俳優がそれぞれの場所を回転するように台詞を述べて、観客達の想像力を応用する形式に、カブキの様式性を重ね合わせて、俳句調の台詞で、衣装はコスチュームデザインの学生の作品で中近東と和式の衣装を合わせた美しいコスチュームでした。

この「イヤーゴの陰謀」はカイロ国際新演劇祭に新演劇として招待されて、最優秀作品として受賞、エジプト国外務大臣から金メダルと古代の TUTMOSE 二世王の小型像などを受理しました。この荣誉ある受賞ならびに大学の演劇科、大学院での演劇指導等、大学院の創設の際の貢献が認められ、タウスン大学名誉人文博士の称号を受けたのです。

その演劇祭の審査員の一人である、ドイツ国立劇場の芸術監督がドイツ国立劇場でも上演を要望され、私を「イヤーゴの陰謀」の監督として招聘し、一年間のレパトリーとして公演しました。

ドイツの俳優達は英語が堪能でリハーサルの前は英語でおこないましたが、公演はドイツ語でした。リハーサルの準備として、日舞の一部と心と床の清めとしてまず床の清掃をしてから稽古着の浴衣の折りたたみなどをおこないました。この間、国立劇場の前にあるバーハウス学院においても茶道などの紹介をしました。

演劇だけでなく生花の世界でも、古典から現代感覚に合うように変貌させるユニークな技法を重ねて体験する機会に恵まれたことは、「一期一会」の全的意義を土壤としての活動であり、茶道も現代のアメリカに合うテーブルや椅子での点前や、古来の茶道具に限らず「見立て物」などその用途に美しく合えば良いという考えで、「日本館」の茶道のクラスにも将来応用していきたいと思っております。

ちなみに私は十七世中村勘三郎師の弟子であって中村勘蔵の名を振付師として許されており、茶道では大日本茶道学会での修行の結果、坐久庵 宗正 仙昌の茶名・庵号を許され、さらに生花では龍生派家元教授を許されております。

そのイリノイカブキの卒業生で、現在ハリウッド映画やテレビ番組のスターとなった、ニ

ック・オーファーマン君が、親切にも「現在の私が在るのは先生の教えを守ったおかげです」と「日本館」の庭先の池の畔に東屋（あづまや）を自らハリウッドの木工場で製材して建築したあとに、分解してさらに輸送し、ニック自身ハンマーを手にして完成させ「師弟同道」と名付けました。

その後、毎年のようにキャンパスや地元の劇場でワンマンショーをおこない、その収入を日本館の維持費の一部にと寄付してくれております。彼の舞台からの話は、学生達にも大きな影響を与え、若者の前進していく道を若者達の言葉で、酒の飲み過ぎや薬物への対応など学生向きのジョークを混ぜた彼の舞台に、キャンパスでも熱狂的なファンが増えています。

1992年には前記の親友であった A. D. Moore 教授の退官、今まで私の活動をサポートしてくれていた美術科課長、芸術学部部長に続き学長達の退官で、すべての環境が変り、私の仕事の渋滞が目立ち始めました。

私も 30 歳でイリノイ大学に務めてより、最早 60 歳を迎えて、この機会に退官することに決め、クラナートセンターでの退官記念歌舞伎舞踊のコンサートを開きました。

演目の最後は歌舞伎舞踊「常磐津山姥（ときわづやまうば）」で、山姥である母親が都に旅立つ幼子の金時を山の上から“さらば”と扇を頭上に挙げてのポーズで終わるのですが、それは長年サポートして頂いた観客達への“さようなら”の心が強く、観客の中にはハンカチで涙をぬぐう姿が舞台上の私にも見えて感慨無量の心境でした。

終演後、ロビーで大勢の人達がレセプションを楽しんでおりまして、私が化粧を洗い落とし、衣類も改めてロビーに現れると大きな拍手と共に学長より感謝状を授与され、祝辞をいただいて感激のひとつときでした。

この間に前記の美術科の古株教授が「我々は昌三の真価を知らなかった。悪かった」と妻のアリスに話をしたと自宅に帰ってから伝えてくれました。

昨年 2018 年 9 月に「新日本館」もすでに 20 周年経ち、大がかりな祝賀の行事がおこなわれましたが、校内だけでなくイリノイ州の名所として公式に州の案内にも書かれている程の存在となり、多くの学生達の受講には手狭になり、建て増しの計画が考慮されておりました。

妻のアリスの長兄であるジョージ・小倉博士は 2018 年 5 月に老人性肺炎で入院し眠ったまま死去しました。彼はコロラド州デンバー市の著名な検死官で、長年の検死官を務める間、色々と検死鑑定結果の変更を押しつけられる事件の中で、絶対に正しいものは正しい、と圧力に屈しない検死官として現代演劇の台本の中にも例として書かれるほどの人物でした。彼の妻も 20 数年前死去、その後一人暮らしを続けておりました。99 歳の年齢で運転免許証も取り上げられて、食品の買い物にも不自由な生活に、2017 年に我々が住むシャンペンのコンドミニアムの知人達が西海岸オレゴン州の息子達の近くに移転したために、その一軒が購入可能となりました。当時老人性肺炎でデンバー市の病院に入院中の義兄を迎えに行き、住居の処理を済ませて、無事にシャンペンに移転、クラナートセンターでのコンサートなどが楽しめるシャンペン市での生活を楽しんでおりました。

「日本館」のオープンハウスのプログラムとして私の大文字書の実演があり、義兄も度々「日本館」の催しに出席していましたが、私の実技披露という機会、私の直ぐ側にジョージ義兄に郡司元館長の娘であるジェニファー館長が椅子を用意、私の書道についての話の後で実技を終えて、見回すと「禅と書道」と題したクラスの一員で物理学専攻のアレックス君が立って見ており、その周りに彼の家族が見学しているのを発見。「アレックス、今度は君が同じ一行物（いちぎょうもの）の禅語を書いて見せなさい」という突然の私の声に驚き戸惑っていましたが、「君にはできるから書いてごらん」と励ますと、公衆の面前、父母兄弟の注目に胆力を絞り出し、一気に一行物を力強く見事に書き上げて、一同の喝采を受けました。

この状況と「日本館」での授業の成果を目撃した義兄は、日系二世アメリカ人として衝撃的な感銘を受けたと帰宅後話してくれました。彼は空軍医官将校として1950年代東ドイツに駐在していて、同時期、日系アメリカ人達の強制収容に強く怒りを覚えて、その不毛の遠地に収容された記録の書類の収集を始め、同時期アメリカ政府は、それらの書物類を買い占めて焼却していた関係で、友人他達のサポートと共に、彼の書物類は完璧なコレクションとなっていました。100歳の誕生日をデンバーからの友人達や日本館での友人達に囲まれて盛大な誕生祝いをおこないました。

彼は西南部原住民であるナバホー、ホピー族の工芸品の焼き物や織物に絵画などのコレクションでも有名で、イリノイ大学クラナート美術館にジョージ・小倉コレクションとして寄贈、来年にはその一般公開の祝典が予定されており、彼のコレクションの「日系アメリカ人強制収容に関する書類も「日本館」に寄贈して、そのためには、そのライブラリーとしての場所に必要とする費用も考えなければ」との私の誘いに、それが可能であれば、と一気に100万ドルの寄贈を即座に日本館に通知しました。「日本館」側も増築を計画していた所なので、そのライブラリーを追加すると合計最低300万ドルが必要、とのジェニファー館長の意思を理解して重ねて100万ドルをジョージ義兄から、我々のカリフォルニアの不動産とデンバー市にある不動産の売却収入を合わせて100万ドル、合計300万ドルの寄贈をおこないました。建て増しの鉄入れ式は今秋頃と予定されています。

1975年に私費でコーン畑の真ん中に蒔いた「日本館」の種が花となり、未来の日本だけでなく、現在8千人の中国本土から、2千人の韓国、1千人のインドからの留学生を抱えるイリノイ大学の中で、アジア文化の華の紹介拠点、日米政治社会問題の研究所としての大きな夢の華が開く事を祈ります。

4 文化学院と私

文化学院での体験なくして現在の私はないと信じます。

小学生の頃より絵画、体操、国語のクラス以外は腹痛とか頭痛と告げて医務室に行き、看護婦がいなくなると他の先生の教室に潜り込み図画をと、自分の好きなクラスにしか出なかった、異質児童の私には西村伊作先生の遺訓は生涯の道導となっております。ある日、伊作

先生の私室に伺った際、「佐藤君、僕はこの湯船に横になって天井に移る虹の様な光の反射を見るのが心の憩いで、芸術も人の心に憩いや希望を与えなければ芸術の意味がない」との教えはいまも鮮明に覚えています。そして土曜教会での各界の著名人達と伊作先生の対談を、学生達はそれぞれ弁当を食べながら知能的な満腹感を得ておりました。

当時の学院では出席簿がなく、伊作先生の「自分の専攻でなくとも自分の好きなクラスを何回でも受講すれば良い」という教えに従い、イリノイ大学の毎新学期に、私のクラスを受ける学生達に、ここに出席簿を置きますから、「一学期分の出席を今自分で書き込んで結構です。なぜなら貴方達が月謝を払って大学に来ているので、サボってもそれは貴方達の費用の無駄なだけですが、私は貴方達の希望する人生の目標となる未知の世界の窓を示し、その窓を大きく開くのが、私の教師としての義務で、もしも窓の外の世界が望みでなければ貴方と共に探して別の窓の扉を開けましょう。ただし窓から飛び出すのは貴方達の努力で、自分の力でその窓に登り、飛び出して、新しい世界を体験しなければなりません。もし、体験した世界が目的に合わない場合は、共に別な窓を探しましょう」と学期始めに私の任務を説明しました。

イリノイ大学の美術科の教室で授業する墨絵・生け花、書道のクラスの学生達とこのような交流がいつか美術科科長に知られて、実際に授業の参観に来られて、他の教授達に「昌三のクラスとその授業を参観するように」と教授会の席で述べられたのでした。こうしたアメリカの大学でおこなったユニークな教育法は伊作先生と文化学院での体験なしでは成立たなかったことと信じます。

イリノイ大学では 1964 年から 1992 年に退官するまでは、「日本館の運営」、美術科教授としての授業に加えて、1969 年に完成したアメリカ三大パフォーミングアーツセンターとされる「クラナートセンター」の専任芸術家として任命されて、歌舞伎のクラスとその公演、及び台本を歌舞伎調リズムに合わせての意識・英訳、舞台装・衣装のデザインと制作方法をコスチュームショップの職員達に指導。一つの公演のためには 400 時間以上の準備時間が必要であり、実に多忙を極める体験でした。1992 年退官記念の歌舞伎舞踊の公演の際、開幕前の退官セレモニーとして当時学長のモートン・ウエアー博士は、佐藤教授一人が退官すると新しく 3 人の教授達を雇用しなければとおっしゃっていたそうです。イリノイ大学の機構としては異例の同大学の教授に「名誉美学博士号」を授与されました。

イリノイ州知事よりイリノイ州芸術賞を、シカゴ日米協会から文化奨励賞の第一回目を受賞。アメリカ墨絵協会から「マスターアーティストティチャー」称号を得て、それから後 2004 年に日本政府から瑞宝小綬章の叙勲、と長年の日本文化普及活動を認めていただきました。

5 なぜアメリカで日本伝統芸術

アメリカの B29 がサーチライトに照らされながら焼夷弾を花火の様に投下すると、たちまちの内に大阪市が火の海となり、その猛火の海の下を防空頭巾をかぶり這い出す様に安全地

帯に辿り着く真っ黒になった被災者達、その最後に若い母親が赤子を背負って、もの凄い勢いの炎の下から這い出て安全地帯に辿り着き、背中に背負った赤子が猛火から逃げ回る激しい動きのためどこかに落ちてしまった事に気づき、その赤子の名を叫びながら再び猛火の海に戻ろうとする若い母親の腕や体を、周りの人達が必死に抱きしめて止めようとする人達の影、赤子の名前を泣き叫ぶ母親が熱い猛火に真っ赤に照らし出されている姿、その悲惨な風景は当時小学4年生であった私の記憶から現在まで消えることはありません。また、私の父親の出身地が広島市内で、ピカドンとのみ知る新型爆弾で全滅した広島に、終戦直後の9月の初めに私を連れて親族を探すために、客車は進駐軍に接收され、我々は屋根の無い貨物車の床に座って、石炭の煤で真っ黒な姿で広島に到着しました。1ヵ月間もの間、食料もない焼け野原に野宿し、広島城の石組みの片面は強烈な原爆の光線のために一皮はげ落ちて真新しくなって、市街電車が吹き飛ばされてビルに突き当たり共に溶けた鉄骨のみの残骸、人の姿の影が白く残る石の階段などの恐ろしい焼け跡を放浪し続けても、父親の親族は探せなかったのです。

これらは私の少年時体験の一部でした。それは戦争という悲劇の只一部の記憶です。

なぜ戦争をして多くの人達が虐殺されるのか、その疑問は常に心から消えませんでした。

子供の時から母親の歌舞伎観劇に連れて行かれて、日本舞踊や自室では絵画を好み、やがて京都大原に弟子達と自給自足の生活をしていたことから画壇の仙人と言われた、院展の小松均先生を師として日本絵画の基礎を得た私でした。文化学院に入って村井先生の抽象画に油絵というジャンルに目覚めた後、学院卒業後は芝公園の近くの東宝芸能学校に入り、第二期生として、バレエ・モダンダンス・タップダンスなどや演技と芸能歴史などを学び、日本の美学の一例として活性空間を尊ぶその反面、西欧美学の一例としては音楽や文学も充実性を求める。私自身がその体験で東西の違いを絵画や舞踊からと比較文化の一端を体験して、イリノイ大学での日本伝統美術講座の基礎を得たのです。

それと同時に異国間の親善には、その国民達の長年の心の声である、伝統芸術が国際交流には一番効果的であると信じるようになり、長年与えられる機会のあるたびに日本伝統芸術を紹介してきました。

現在も「日本館」での「禅と書道」茶室に欠かせない一行物を通して、禅思想の授業を続けております。

禅思想は日本文化の基礎であると思信するのですが、難しいとされる禅思想を、茶道では一番の道具とされる禅語掛け軸の一行物の禅語を、クラスでは毎回変えて、禅の意義を解りやすく説明して、同時に体験させます。「『単を示す』という2文字で、合わせると『禅』の漢字となります。その個、すなわち自分自身一個の人間として完全な理解なくしては、何事も容易には完成できない」と私の説明に、若いアメリカ人の学生達も理解してくれます。こうした講義ができるのも鎌倉に住み、円覚寺の若い禅僧達を友人とし、優しく導かれた有り難い体験のおかげであります。

イリノイ大学芸術学部 名誉教授 佐藤昌三